積極的な設備投資で畜産経営をより効率的に

熊本県球磨郡錦町 (株)有田牧場

熊本県球磨郡錦町の(株)有田牧場は、肉用牛一貫と酪農を営む総飼養頭数約1600頭の牧場である。社長の有田耕一氏は、父の八起氏が亡くなられたことを受け、平成20年に就農し経営継承。当時繁殖８頭・酪農50頭だった牧場を、弟の和重氏とともに約15年で現在の規模まで拡大してきた。特徴的なのは少人数で高い収益を上げられるよう様々な設備投資をし、さらに管理面でもできるだけ集中管理ができるよう工夫をし、作業や観察の動線を考えた牧場作りがなされていること。実際に、繁殖・肥育・酪農という３分野の牧場を、家族４人・従業員８人の少人数体制で切り盛りしている（しかも耕畜連携により延べ面積約400haの飼料作も行っている)。今月号の特集はICT機器をテーマにしているが、有田牧場においても「牛歩」(コムテック)、「@MOWMENT」(ライブストック・アグリテクノ)、「U-motion」(デザミス)、さらに市販の防犯カメラと４つの機器を導入し、活用している。有田氏は「毎年人件費１人分以上の投資をする」と考えており、牧場内にはこの他にもミルクシャトルや自動給餌機、超音波式加湿器、温湯供給システムなど、様々な設備が見られた。（詳細は28ページより）

有田耕一氏

集中管理により、少ない人員で多頭数を管理できるようにしているのが有田牧場の特徴。これは分娩房で16頭収容可能。産まれた子牛は０日で親から離している

コムテックの「牛歩」を装着した繁殖牛たち。発情発見に用いている

分娩房は牧場でも最も目に留まりやすい場所に設置しているが、さらにサポートとして市販の防犯カメラを設置し、どこでも様子を見られるようにしている

子牛にはライブストック・アグリテクノの「@MOWMENT」（アットモーメント）を使用。首に下げたタグで子牛の活動量を判定し、活動量が低下するとアラートがくる。発熱などの症状が出る前に対処できることから、疾病の重症化が目に見えて減ったそうだ

肥育牛にはデザミスの「U-motion」（ユーモーション）を使用。導入のきっかけは起立困難による死亡牛を出してしまったこと。現在は約300台のセンサーを導入し、肥育中期以降の牛たちに装着。起立困難状態の早期発見を主な目的として活用している

ICT機器以外にも有田牧場には様々な設備が導入されている。これはミルクシャトル。無駄なく一定量のミルクを保温状態で与えられる

生後１ヵ月頃まではハッチで、その後はこの自作の枠場を用いて哺乳している。マスの後ろに通路を作り、時間になったら１マスずつ仕切りを開けて飲みに来てもらう形だ。これも集中管理の１つである

哺育舎には市販の超音波式加湿器を設置し、呼吸器病対策に活用している。夜間に１時間ほどミスト状の次亜塩素酸水を噴霧する

肥育牛舎のようす。ライン式の自動給餌機を設置している。この他、自走式の自動給餌器を設置した牛舎もある